

斷腸亭日記卷五

斷腸亭日乗 五

第五同配本(全七冊)

昭和五十六年一月二十三日 第一刷發行

定價三五〇〇圓

著者 永井 壯吉
なが い そう きち

發行者 綠川 亨
りく せん じょう

發行所 株式会社 岩波書店
〒101 東京都千代田區一ツ橋二一五

電話 〇三・六五四二二
振替 東京六二云四〇

印刷・精興社 製本・牧製本

落丁本・亂丁本はお取替いたします

目次

目次

斷腸亭日記	第二十四卷(昭和十五年)	三
斷腸亭日記	卷二拾四續(昭和十五年續)	九三
斷腸亭日記	第貳拾伍卷(昭和十六年)	一二七
斷腸亭日記	卷二十五續(昭和十六年續)	一九七
斷腸亭日記	卷二拾六(昭和十七年)	二四五
斷腸亭日記	第二十七卷(昭和十八年)	三〇七
斷腸亭日錄	卷貳拾八(昭和十九年)	四二
斷腸亭日錄	第二十八卷續(昭和十九年續)	四六一

後記	五二三
----	-----

斷腸亭日乘
五

西曆壹千九百四十年

昭和十五年歲次庚辰

斷腸亭日記

第二十四卷

荷風書屋



斷腸亭日記卷第二十四

荷風散人年六十二

昭和十五年歲次庚辰

正月初一。晴。北風吹きて寒し。夜菅原明朗永井智子來話。一昨三十日夜上野停車場にて、旅客の押寄せ來るさま物すごかりしかば、驛員怪我人の出でん事を慮り改札口を遮斷し乗客をプラットフォームに入れしめず、此れが爲青森及び新潟行列車は空車のまゝ出發したりと云ふ。此事新聞紙上には見えざりと云ふ。

〔欄外墨書〕舊十一月念二

正月初二。午後淺草より玉の井を歩む。淺草公園の人出去年よりも多きが如し。玉の井は昨元日は休みにて全体に去年正月よりも靜なりと云ふ。森永にて獨夕餉を食し家にかへる。

正月初三。けふも好く晴れて風なし。昏暮出で、芝口に夕餉を食す。〔以下三行弱切取〕

〔原本朱點、以下同じ〕
・正月初四。晴。南風吹きてあたゝかなり。午後食料品を求めむとて日本橋大黒屋に行く。道すが

ら電車の窗より新年の町を見るに、松屋松坂屋高島屋白木屋など各百貨店の硝子窓には、いづれも

申合せし如く金屏風の前に日月の錦旗を立て、神代風俗の人形鎧武者などを飾りたるさま、どうやら祭の花車人形を取りおろして並べたるが如し。道の角々にはお米を大切にしませう、又家ごとに神様をまつりませうなど大書せし立札を出したり。(以下八行切取)

一月五日。晴。鷺津郁太郎年賀に来る。午後酒泉空庵氏來話。昏黑銀座に飢して淺草に往く。谷中氏常磐座踊子四五人と森永に會談してかへる。此夜溫暖春の如し。

一月六日。今日も晴れてあたゝかなり。庭の土かはきて灰の如し。去年十一月の末より今日まで殆雨なし。新聞の記事を見るに水道水切れのおそれありと云ふ。木炭米穀の不足につぎて飲水量の欠乏を見る。(此間約十二字切取。以下行間補)天罰恐るべきなり。(以上補)終日臥蓐に在りて讀書。日の暮るゝを待ち出で、芝口の今朝牛店に至り食事をなす。晝夕を兼ねての食事なり。牛肉ヒレ本年より一人前につき拾五錢値上したりと云ふ。

求縁廣告のはなし

新聞に求縁廣告を出して春を嚮ぐ女去年あたりより俄に多くなりし由。或人の實見談をきくに、廣告の文中に御援助賜りたしといふ語を交へあるは賣春にあらざれば妾の口を求めるものにして、この語はいつの頃より誰がつくり出せしものか知らねど、一種の合言葉となり、男の方より女をさか^つず時には援助出來る婦人を求むと書き返書の届先はどこその郵便局留置として廣告すれば、明朝を待たず其日の夕刻までには少くとも五六通の返書に接し得べしと云ふ。女は二十

五六より三十七八歳までにて、初め會見の場處は新宿と上野が多く、新橋銀座邊は割合に少し。去年の暮も押詰まりしころ其人の實行せしはなしを聞くに、新宿驛前二幸食堂の入口に午後三時お待申上げて居ります。紫色の風呂敷包を持つて居りますからとの返書通り。そのところに行きしに、年のころ二十七八。場末のカフェーの女給とも見ゆる女、すぐにそれらしく見えたれば、此方より何々さんと手紙の名前を呼び、打連れて人込みの中を歩みながら話を進むるに、今日だけ二十圓下さいまし、其後は十圓でも十五圓でも御都合次第でと女の方より切出し、伊勢丹百貨店横の大通を左に折れ静な横町の圓宿に入り、此の次からはアツパートへ入らつしやいと電話と室の番號とを知らせたり。其人大晦日の夕方電話を先にかけて置いて其のアパートに行きしに、同じ年頃の小作りの女、かの女と二人にて長火鉢にて大福餅をやきゐたり。小柄の女は男の入り来るを見て立去りしを、あれはお友達かときけば以前の女荅へて、あの人は派出所婦會の人ですが私がはなしをすればすぐ承知します。お思召があるなら呼んで來ませう。この部屋でかまひません。私は其間お風呂に行つて來ますと云ふ調子にてはなしの早いにはさすがの道樂者も一驚を喫したりと云ふ。猶また其人ののはなしに日本橋通り舊高島屋百貨店假店在りし處、横町路地によし本^{電話京橋九千〇九六}といふ待合には私娼出入する由。又根岸笹の雪側の横町に馬場といふ家私娼の周旋宿なりと云ふ。

一月七日。晴れてあたゝかなり。薄暮門を出でむとするに細雨道を潤すを見る。尾張町三越にて

葡萄酒を購はむとするに舶來品は拾圓以上となりたれば、和製一壺金貳圓を購ふ。石鹼齒磨等いよ／＼和製のみとなれり。わが家には英國製シャボン猶十個位はあるべし。酒類もキューイラツソオ、ブランドイ、オリイブ油など各一壺ウーロン茶は三四斤位のたくはへあり。

一月八日。晴。風はげしく塵烟濛々たり。晝飯の時昨日購ひたる和製葡萄酒をこゝろみるに稀薄水の如く滋味更になし。壺の形とレッテルの色のみ舶來品に似たるも可笑し。午後物買ひにと銀座に行く。煙草屋にもマツチなき店次第に多くなれり。飲食店にて食事の際煙草の火を命ずる時給仕人マツチをすりて煙草に火をつけ、マツチの箱はおのれのポケットに入れて立去るなり。

一月九日。晴。北風。寒氣凜冽。午後既に氷を見る。平井君來り話す。黄昏共に出で、芝口の今朝に飮し淺草に往き森永に憩ふ。常磐座の踊子と共にオペラ館を観る。歸途風止む。

・一月十日。晴。晡下土州橋よりかきながら町を過ぎてかへる。

一月十一日。昏暮銀座より淺草に往く。森永喫茶店よりオペラ館に往かんとする時、戸口にて突然二人の男名刺を差し文學上の意見を問ふ。其態度恰も刑事の路上に通行人を呼留めて尋問するに似たり。名刺は窃に裂きて捨てたれば何人なるを知らず。兎に角訪問記者の輩夜間淺草邊まで手を廻して人を捕へむとするに至りては今後一層警戒し注意せざるべからず。

一月十二日。晴。昏暮銀座を歩む。岩波書店去年十二月勘定左の如し。

澤東綺譚

第五編
四同

貳百部 金六拾圓也

おもかげ

第三編
二同

五百部 金百六拾五圓也

メ金貳百六拾五圓也

一月十三日。晴。〔以下七行弱切取〕一月十三日晴、旅順要塞司令部より旅順占領三十年祭につき詩

歌を揮毫し郵送すべしとの書狀來る軍人間に余が名を知られたるは恐るべく厭ふべきの限りなりいよ／＼筆を焚くべき時は來れり〔以上欄外袖〕

〔欄外朱書〕旅順の歌よめといはれて つくね髪高きとりての名にちなむ妹がひたへのをかしかりけり 浪まくら稻佐の里のにぎはひをしのぶよすがも絶へ果てにけり

一月十三日補記。夜新宿の裏町に市川とよべる女のアパートをたづねしが不在なりし故ムウラン劇場を立見す。辰年にちなめる舞踊の一節に芥川龍之助の幽靈を出したり。侮辱の心なるや滑稽の意なるや。現代人の趣味全く解すべからず。

一月十四日。晴後に陰。鄰家のラヂオ正午より喧騒を極むるを以て日曜日なるを知る。薄暮銀座食堂に針し三越にて物買はむとする時偶然歌川氏に逢ふ。日耳曼茶房に入りて款語す。又圖らず高橋邦氏の來るに逢ふ。街上又たま／＼杉野昌甫氏の來るに逢ひ汁粉屋梅林に憩ふ。裱匠阿部氏在り。此日黄昏西銀座難波橋北詰に火災あり。附近の妓家皆弓張提灯を出せり。諸子と共に焼跡を見る。阿部氏のはなしにこの處は數年前銀栖鳳といふ酒亭の火災に女中の焼死せし不吉の地なり。曾て或

妓家にて老猫を殺したる祟りなりと云ふ。

〔欄外朱書〕夜内閣更迭の號外出づ

・一月十五日。晴。午後谷中氏來話。夜芝口に飢す。

〔欄外朱書〕静岡市大火

一月十六日。晴又陰。終日家に在り。

一月十七日。晴。芝口の千成屋に夕飯を喫す。女中のはなしに町の風呂屋今まで午後二時より開業のところ、午後四時となりしたため入浴の時間なく、且又女湯込合ひて入ること能はざるほどなりと云ふ。

〔欄外朱書〕學生の飲酒を禁ず

一月十八日。陰。夜淺草に在り。谷中氏及常磐座踊子等と森永に飢す。歸途田村町にて電車乗換の際線路につまづき倒れてツボンの膝を破る。老脚あはれむべし。むかし蜀山人神田橋にてつまづきし時の狂歌を思出で、

しのぶてふ辰巳の里も知らぬ身は

うしと見し世ぞ更にかなしき

すりむきし膝は疊の上ならで

石につまづく老のさか道

一月十九日。晴。寒氣殊に激し。平井君書あり。

一月二十日。晴。昏暮土州橋に往き淺草に訃す。

一月廿一日。晴。微邪。門を出でず。

一月廿二日。晴。午後三菱銀行に至り最寄の郵便局にて所得税其他を納む。金參百圓餘なり。(以下約四字切取)

一月廿三日。晴。午後銀座に至り物買うてかへる。尾張町四辻より京橋邊戰地より歸國の兵酒氣を帶びて徘徊す。軍服の胸に姓名をしたゝめたる布片を縫ひつけたり。(以下約十二字切取) 亂暴せぬ用心ならんか、徵役人の如し、(以上補)

浪花節語虎丸の事

放送局員某氏のはなしに、浪花節語鼈甲齋虎丸が住居の馬鹿氣たることは到底常人の思及ばざるものなるべし。地處全体を堀りて池となしたれば庭はなく、池の一隅に高欄付御殿風の家屋（マコ）を築き、玄關より奥へ行くに従ひ一間毎に床を高くし、其の最高きところをおのれが居間となし御簾を下げたり。來訪者は下段の間より主人を迎（マコ）ぎ見て用談をなす。主人虎丸は高欄にもたれ池の水を眺むるにもまた珍なる趣向あり。池の岸の一方にトーチカの如きセメントの築山をつくり、其後を風呂場となし、風呂をたく時その烟が築山の頂上より立ちのぼりて噴火山の如く見ゆるやうになしたり。然るにこの家屋水の上に建てたるなれば濕氣甚しく水また腐敗し

て人の健康によろしからず、主人虎丸は先年既に病死し、其後住む者なし。兎に角これ程をか
しな家は世界をさがしても無かるべしと云ふ。（虎丸は何代目なるやまた家の在る處共に聞き
漏したり。）

一月廿四日。晴。寒甚し。終日葺中讀書。昏暮芝口に飮して淺草に至る。歸途寒月晝の如し。

一月廿五日。天氣乍晴。雨ふるべき望なし。午後谷中生電話にて都新聞紙上に北原某なるもの余
に關する愚劣なる批評文を連載しつゝありと云ふ。去十一日夜淺草公園喫茶店森永戸口にて會談を
強要せしは都新聞記者なりしなり。黄昏^{五時}過滿月既に明なり。銀座三浦屋にて再び牛酪を獲たり。
舶來葡萄酒^{參四圖}位のもの。まだ少しありと云ふ。欣喜措く能はず。

一月廿六日。晴。正午兜町片岡商店永田氏電話にて去月主人病歿。店の者其儘残りて來月一日よ
り再び開店の筈なれば祝の發句賜りたしとなり。

若枝やつき木榮ゆる八重の梅

親にまなぶ籠鶯の初音かな

新しき暖簾出て見よ巢立鳥

一月廿七日。晴れて寒し。午後森銃三君尾州徳川家の文庫に保存せらるゝ文武高名錄二卷を携來
りて示さる。明治廿六年金港堂の版なり。卷中大沼枕山晩年の画像及左の文あり。

我日本古稱君子國。何也。爲正人也。是故日本刀之法亦唯在正。其流派雖許多而刀法皆一致也。

昭和十五年一月

余少年之時學刀於伊庭氏。其持刀之第一號正眼。蓋學刀正而當敵眼。然後臨機隨變。縱橫高下。

出正入奇。今也刀屬廢棄。因書此貽於後云。戊子新正枕山叟。

一月廿八日日曜 陰後に晴。銀座を歩むに學生禁酒の令出でしに係らず今猶ビヤホールの卓に倚る

ものあるを見る。怪しむべきなり。

一月廿九日。寒風吹きすさみて空くまなく晴渡りたり。國內火災各地に起り山火事もありと云ふ。正午兜町片岡商店の新主人來話。夜芝口に餅して淺草に至る。

一月三十日。晴。谷中氏都新聞切抜を送らる。平井書有り。暮方やさしき聲にて電話をかけ來りしものあり。用事を問ふに是非お目にかゝりてお話いたしたといふ。其聲柄言葉使より推察するに田舎者でもなきやうなれば面談を諾せしに、夜九時ごろに至り少しおそくなりたれば明後日お邪魔すべしと再び電話かけ越しぬ。今の世にはかくの如き會體の知れざる女少からず、さして怪しむにも當らざるべし。

・一月卅一日。晴れて寒いよ／＼きびし。火の氣なき室内正午華氏四十度なり。炭屋來りて闇取引の御詮儀いよ／＼きびしくなり、山元にて炭を焼かぬやうになりたれば東京市内にはいよ／＼炭少くなるべしと云ふ。夜芝口に夕飯を喫して玉の井の里に往く。窓の女達も染色毒よしきスフの新衣をきるもの多し。赤黒青の如き原色ばかりの大形模様もこの里の女には却てよく似合ひて見ゆ。七丁目廣瀬の窓にゐたる女

小説淺草の灯の作者の家に
下女奉公せしと云ふ女なり

年季明けていづこにか去りたり。賑本通の左側大塚の